

# じんだい

第15号

2009.1.9

発行：医療法人社団 欣助会 吉祥寺病院

調布市深大寺北町4-17-1 ☎042-482-9151



## 基本理念

患者様やご家族の側に立った医療  
患者様の社会復帰を目指す医療  
全職員相互の力を発揮できる医療



河口湖にて撮影

## 新年のご挨拶

院長 塚本 一



明けましておめでとうございます。  
今年もよろしく願いいたします。  
今回は、皆様に関わらず日本で行われている医療崩壊についてお伝えしたいと思います。  
昨年10月、脳出血を起こした江東区内の妊婦が都立墨東病院でいったん受け入れを断られ、出産3日後に死亡するという事件が起きました。また、9月には調布市においても、市内の病院で脳出血を起こした市内の妊婦が、杏林大学病院など6病院に受け入れを断られ、意識不明の重体となりました。いま医療崩壊は、東京全域で目に見える形で進行しています。  
小泉内閣による「聖域なき医療改革」「改革

なくして成長なし」の旗印の下に、医療費はどんどん削られてきました。その上、国民の医療への期待は高まるばかりで、医療をめぐるトラブルも増えました。医療現場に警察が立ち入ることも多くなり、善意の医療も結果次第では、犯罪として取り扱われるようになってきました。患者さんの権利意識は、社会の後押しで肥大化してきています。そのため、理不尽としか思えないようなことに対しても、医師がたしなめることすら許されないムードとなってきています。そのような中、激

しい労働条件の下でじっと我慢して患者さんのために頑張っていた勤務医が、病院という職場を立ち去り始めたのです。そもそも、病院の勤務医の給与は多いものではなく、彼らは自分達の知識や技術に対する自負心と病者に奉仕することで得られる満足感のために働いていたのです。そのため、ハードワーク・ローリターンにも耐えてきました。理不尽な扱いを受け、黙って相手に奉仕せざるを得ない状態が続けば、人間の誇りと士気は大きく損なわれます。それだけでなく、日本では医師1人が診ている患者数は米国の5倍、欧州諸国の3～4倍におよび、過酷な状態が続いていました。このような状況のため、2次救急を受けていた病院が閉鎖したり、2次救急を受け入れられなくなるという事が、東京でも起こっています。

都民は実感として医療の崩壊を肌で感じていないかもしれません。しかし、介護老人保健施設「花水木」でも夜間、入所されている方の具合が悪くなり、救急車を要請したところ、救急車はすぐ来てくれましたが、搬送先の救急病院が見つからず、2時間以上花水木の玄関から出発できないという事がありました（9ヶ所目ぐらいでやっと受け入れていただけました）。また、私の妻などは、もし私が急病で倒れた場合、どこで入院を引き受けてもらえるのかと真剣に心配しています。

昨年11月7日の読売新聞の夕刊に、さいたま市の男子大学生が下記の記事を投稿していました。

東京都での「妊婦受け入れ拒否」の記事を読み疑問に思った。

この「拒否」という表現は正しくなく、病院側は受け入れたくても受け入れることができなかつたのであり、受け入れ「不能」とした方が適当だろう。

「拒否」としてしまうと、受け入れる努力をしている病院の名誉を根拠なく傷つけることではないかと思う。今回の問題は行政によることは明らかなのだから「拒否」ではなく「不能」という表現を使ってほしい。その通りだと思います。

医療や福祉サービスは、必要なときに、必要なサービスを受けられ、支払能力に応じて医療サービスへの利用格差が生まれない体制が必要であり、利用者が供給者を信頼し、その信頼が報われる制度が求められていると考えます。そのためには、与党であれ、野党であれ、長年の医療費抑制のためにいろいろな面でおかしくなっている医療を直し、医療問題に真剣に取り組もうという政党を、選挙で支持することが、日本の医療を救う唯一の道であると信じています。

#### 私が薦める一冊（院長）

私は昨年11月、慶應義塾大学商学部教授の権丈善一先生の講演をお聴きし、先生が「市場のダイナミズムを享受しながら、そこで生きている人が尊厳をもって人間らしく生きてゆくことができ、かつひとりの人間として生まれたときに備えていた資質を十分開花させることができる機会が、ひろく平等に開かれた社会はいかなるものであるか？」という問いを意識して研究されている事を知りました。そこで、先生が書かれた「医療政策は選挙で変える」という本に出会い、今後の日本のあるべき姿を考えさせられました。大変に勉強になる本だと思いますので、皆様にも紹介させていただきます。

#### 「医療政策は選挙で変える」

権丈善一著 慶應義塾大学出版会

定価 1,800円

## また、新たな一歩を

事務長 大須賀 忠雄

新年明けましておめでとうございます。

すがすがしい新年を迎えることができましたでしょうか。「一年の計は元旦にあり」といわれています。また、「初心忘るべからず」という言葉があります。今年はこんなことをしてみようとか、今年はこんな年であってほしいとか、いろんなことを胸に抱いたことでしょうか。その新鮮な気持ちを常に忘れず、一年を過ごしていただければと思います。

昨年10月に事務長に就任し、ようやくというか、早くもというか3ヶ月が過ぎました。この間いろいろなことが私の中ではあったと思っています。しかし、皆様に支えられなんとか業務をこなしているといった状況です。今年一年も同じような状況が続くものと思われませんが、よろしく願いいたします。

さて、昨年のアメリカのオバマ氏は「チェンジ（変革）」という言葉のスローガンに大統領選挙を戦ってきました。また、日本においても平成20年一年間を表す漢字に「変」が選ばれました。

吉祥寺病院で、昨年いちばん大きな変化は、看護基準を18対1から15対1に上げたことでしょうか。15対1は東京都の指定病院としての

施設基準であり、18対1は診療報酬上精神病棟に経過措置として設けられているもので、いつ取り外されるかわからないため、15対1に基準を上げることは

必須条件でした。15対1に基準を上げるために、また15対1を維持するために、職員の皆様には多大な協力をいただきましたことに深く感謝しております。また、当院が早くから推し進めてきた患者さんの退院促進、社会復帰が精神科地域移行実施加算として点数化されたこともひとつの喜ばしい「変」でした。

ところで、いま世界ではサブプライムローンに端を発し「金融危機」に陥っており、不況の波が国民に大きくのしかかってきています。医療業界においても先行きが見えないといった点では、決して例外ではありません。

精神障害者施策は「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本方針に沿って進められています。そんな中で、吉祥寺病院として進むべき道をしっかりと見据えて、一年が良かったといえるような年にしたいと願っています。



## 精神科看護の質向上を目指して

看護部長 塩入 五十鈴

新年明けましておめでとうございます。

2008年を漢字で表すと「変」でした。変わる、変える、変革、変動等など、中でも良いこと悪いこと色々ありましたが、良かったことについては、看護の配置基準を18:1から15:1に「変」変えたことです。

看護は病院経営上にとっても重要な存在です。巷ではリストラ、不況風が吹いてどことなく暗い世相ですが、看護と経営も時代とともに変わっていくものと危惧しています。各職場も人員に多少ゆとりが持てるようになり、患者様のサービス向上に繋がったものと信じています。これもひとえに皆様方のご協力の賜と感謝申し上げます。

さて、私は18年に着任して、待っていたのは病院機能評価受審の最終段階の準備体制・整備でした。半年余りでその審査日となりあつという間の3日間の審査でした。その後2ヶ月程して認定証が届きました。うれしさの反面本当に認定証を受け取ってよいのだろうかと不安に駆られ、よく足元を見ると自己満足のいくものではなく、師長会でも今がスタートラインであると語ったことを、今も覚えています。

精神科分野という未知の世界に飛び込んで、頭の中が混乱するときもありました。丁度その頃、私たちの先輩である小玉香津子先生の講演「立ちもどる原点をもつ強み、知るほどのことは実行する喜び」を聴く機会があり、基本的には一般科と相違なく、精神科の看護は、看護の原点であることに気づかされ勇気づけられました。

本当に患者様の視点で看護されているだろうか、仕事片付け型の看護ではないだろうか、社会性を磨き、人間をどう観るかなど、良く吟味しながら患者様との相互作用の中で関わり、言

葉を実践に移す、実践を言葉にする、この繰り返しの中で掴むこの看護の基本的考え方は変わることのない一つの判断基準が必要だと思えます。

看護の考え方に求められることは、看護過程の展開によるアセスメントの重要性を考えると、看護の考え方の基準を揺るがすことのない看護理論を用いて、科学的根拠に基づく考え方を根づかせる必要があると考えます。

チーム医療としての取り組みは、各々の職種が専門性を発揮し、統合により質の高い医療の提供が求められます。看護の専門性は、その役割を明確にして、他職種にもきちんと説明が出来る、看護理論の理解を得て同じ土俵の上で論議できるようにしていく必要があります。またチームワークの大切さの中で、個人力を持って質向上を目指していくことも大切です。

看護の質向上は、職場風土の向上にも繋がると思えます。臨床現場で直に相談に乗ったり、一緒に知識を深めたり、自由に意見交換できる看護の専門家である専門看護師、認定看護師を早期に育成し活躍できる場を整える必要があると常々感じています。ごく近い将来当院にも認定看護師が誕生し、活躍されることを心待ちにしています。

今年は大学卒の看護師が数名入職してきます。看護部は、その方々が精神科看護の楽しさ、やりがいを見出せ、キャリアアップできる教育体制を整える課題も抱えています。そしてその受け皿を成熟させていく役割もあると感じています。

今年も良い「変」の変革が出来るよう願っています。



## 文化祭

看護助手 仲岡 研一

今年も、病院恒例の文化祭が、にぎやかに行われました。

ピクニック・運動会との兼ね合いで、今回は11月の開催となりました。

11月ともなると、天気次第では寒くなることがあるので、当日の天気が心配されましたが、運良く小春日和の中での開催となり、ほっとしたのを覚えています。

また今年も、特別企画として、ピエロのじっさいさんを招いた事が、いつもとは違う盛り上がりを見せました。

完成されたピエロのパフォーマンスを目の当たりにして、びっくりした方もたくさんいたのではないのでしょうか。

振り返れば、私も入職してからずっと、レクリエーションに携ってきて、この文化祭にも色々な思い出があります。

雨の中、テントの中で焼いた焼きそば。患者さんよりも職員が熱くなったバザー。いっぱい売れ残り、全病棟を売り歩いたことも。

でもいつもそこには、患者さんの笑顔があったように思います。

今年も、新しく入院されたある患者さんが、私に、「へえー！こんな事もやるんだ、すごいねえ」と、笑顔で話し掛けてくれました。

また、「いつもありがとうね」と言ってくれた方もいました。

スタッフの一人として、やりがいを感じる時でもあり、その一言が次回へのエネルギーになっていることは確かです。

患者さんが、穏やかな入院生活を送れるよう、また社会復帰に向けて少しでも貢献できるよう、これからも頑張っていきたいと思います。



### 吉祥寺病院 自衛消防隊 訓練審査会に参加

平成20年9月12日調布味の素スタジアムにおきまして、調布市自衛消防隊訓練審査会が開催され、当院から2名が参加し、特定防火対象物の部において5位の好成績を収め、敢闘賞を

受賞しました。猛暑の中、1か月半に亘る訓練の成果がでました。関係者の皆様に感謝するとともに、今後の防災活動に活かしてまいります。



### 研修報告 第23回東京都精神科病院協会学会

去る10月15日(水)東京都中野区、中野サンプラザで第23回東京都精神科病院協会学会が開催されました。都内の精神科病院職員や関係者が多数参加しました。プログラム構成は、講演会の他、各病院の演題発表は口演発表、ポスター発表合わせて54題でした。当院からは座長として武藤看護師長、成田看護師長、花宮社会療法部科長が担当しました。一般演題発表では、高木看護師から「当院における暴力被害

の実態調査～被害者の思いから組織として求められる支援とは」室岡看護師から「退院支援に必要な関わりについて～退院基準の考察」、高石看護師から「電話・窓口相談の実践報告～患者の気持ちを支える外来での援助を考える」林看護師から、「不穏時薬与薬の判断基準について」の4題を発表し、精神科看護への取り組みや工夫を凝らした内容でした。





病院の所在地である深大寺北町の町内会は、『深大寺北町山野自治会』と呼ばれている。『山野（さんや）』って何だろう。こんな疑問から今回は、この付近の住居表示の変遷を辿って見た。▼病院の地番は、昭和五十九年十一月の町名地番の改訂により現在の深大寺北町四丁目十七番地一となったが、それ以前は調布市深大寺町千九百八十番地であった。昭和三十年四月に北多摩郡調布町と同神代町が合併し、調布市となった。この「神代」は、今も「都立神代植物公園」として残されている。▼この地の郷土史に詳しい富澤稔氏の著書によると、『深大寺

村』の変遷をこのように記している。大化二年（六四六）国郡制により武蔵野国多摩郡が生まれる。奈良時代には「武蔵野国下多摩郡」、鎌倉時代には「武蔵野国多摩郡」、江戸時代には「武蔵野国多摩郡」に属していたという。明治に入ると多摩郡は、明治二年に品川県、同四年には入間県、同五年には神奈川県に編入され、同二十二年に神奈川県北多摩郡神代村となった。さらに、明治二十六年東京府に編入され、昭和二十七年には東京都北多摩郡神代町となった。▼江戸時代の文政五年（一八二二）に編纂された「新編武蔵風土記稿卷之九十四」に深大寺村の項がある。深大寺村は、東に中仙川・金子の二村、南は佐須・上布田の二村、西は大澤村、北は野川・上仙川の二村に接していた。また、村内は二分され、一つは御料所（天領＝幕府直轄地）で世田

谷領に、もう一つは深大寺領を含めた私領で府中領に属していた。そして深大寺村の小名（小字）に、繪堂・野ヶ谷・宿・又住・山野があった。▼この小名のうちの「山野」は、「御料所ノ西ノ方ナリ」とある。深大寺村を二分する御料所の西で、大澤村（現三鷹市大澤）に接した「山野」が、今の病院の所在地付近（深大寺北町）の呼び名であったのである。ごく最近まで、武蔵境通りを境に、病院側を「東山野」、反対側を「西山野」と呼んでいたとのことである。今も、調布北高の次のバス停に「山野」があり、この通りに面したパーミヤンの脇には「山野公園」がある。▼因みに、病院が昭和二十九年に開院したときの所在地は、北多摩郡神代町山野であったと聞く。

（游衍子）

# 医局担当表

	月	火	水	木	金	土
--	---	---	---	---	---	---

## 《外来担当医》

新患	責任	渡辺／田澤	伊藤	市川	山室	西岡	森
	副①	伊藤	森	西岡	市川	渡辺	山室
	副②	森／市川	西岡／山室	渡辺／伊藤	伊藤／西岡	山室／森	市川／渡辺
診察室(1)	午前	原藤	院長	原藤	金井	原藤	原藤
	午後			渡辺		森	市川
診察室(2)	午前	森	西岡	渡辺	小木	新患 (西岡)	西岡
	午後			西岡			
診察室(3)	午前	新患	新患	新患	新患	山室	新患
	午後	(渡辺／田澤)	(伊藤)	(市川)	(山室)		(森)
診察室(4)	午前	土井	森	山室	伊藤	市川	山室／亀山
	午後						
診察室(5)	午前	金井／田澤	篠崎／慶野	伊藤		篠崎	水落／野田
	午後						



### 〈編集後記〉

昨年の夏も連日猛暑で大変でした。しかし、思い返すと良い思い出ばかりが蘇ってくるから不思議です。(T)

旧年中は「じんだい」をご愛顧賜り、ありがとうございました。今年度も各種イベント等の掲載を予定していますので宜しくお願い申し上げます。(T)

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひ致します。年が明けると、あっという間に誕生日が来てしまいます。

もともと忘れっぽい私ですが、「今度何歳になるんだっけ?」と、無意識に自分の年齢を忘れようとしているような気がする今日この頃です。(S)